

「徳富蘇峰の中国観」に関する

研究史の一考察

板倉 弘明

はじめに

近代という時代の枠組みにおいて、日本と中国（当時の清国）の衝突が提起された出来事は日清戦争（一八九四―九五）である。この日清戦争によって、日本における中国侵略が構想から現実のものとなったことは周知の通りである。しかしながら、日本国内において注目視される歴史というのは、日本が敗戦を経験した第二次世界大戦（一九四一―四五）である。そのような経験をもとにして、現代の日本人は戦争経験者・原爆被害者らが「二度と戦争を起こしてはならない」と後世に伝承しようとして働きかけている。しかし、その一方で、戦争責任に関しては当時の指導者らに限られ、国民は被害者意識を全面に強調しているのが現実の状況である。これまでの傾向として、このような被害者・日本国民像が強調されてきたからこそ、国民までもが侵略主義傾向へ流れた発端である日清戦争を再考するという意義は非常に強いものがあるのではないだろうか。

その日清戦争前後期を通じて、論壇の世界で最も脚光を浴び、国民に

も多大な影響力を及ぼした人物の一人が徳富蘇峰である。蘇峰は、明治、大正、昭和期を代表するジャーナリストであり、当時発刊されていた『国民新聞』によって日清戦争の戦況を国民に伝達する役割を担っていた。また、日清戦争後においては、自らの足で二度中国へ足を運んでおり、その後には『七十八日遊記』（民友社、一九〇六年）、『支那漫遊記』（民友社、一九一八年）を発表している。しかしながら、第二次世界大戦における敗戦に至るまで、日本国内の言論に多大な影響力を及ぼした一方で、戦犯容疑者にまで指定された蘇峰の足跡は、現代においては意図的に消滅させられる運命を辿ることとなった。その結果、現代において蘇峰研究はごく限られた領域でしか行われておらず、これらの研究が最も重要且つ急務を要すると言っても過言ではないであろう。蘇峰の中国観における研究は非常に乏しいものである。このような背景から、本稿では、「徳富蘇峰の中国観」を考察する上で前提となる研究史についての考察を試みることにする。

研究史

「徳富蘇峰の中国観」を主論とした研究では、松本三之介氏が一九六一年に「国民的使命感の歴史の変遷「膨張的国民」―徳富蘇峰について」（『近代日本思想史講座Ⅷ 世界の中の日本』、筑摩書房）を發表したことに始まる。松本論の主体を成しているものは、蘇峰の言論をもとに、日清戦争を契機として蘇峰の思想的転換が急激に変化したか否かということである。具体的に述べるならば、「此の遼東還付が、予の殆ど一生に於ける運命を支配したと云っても差支へあるまい。此事を聞

いて以来、予は精神的に殆ど別人となった」という余りにも有名な蘇峰の述懐についての真意である。同氏は、この真相を究明する手段として、蘇峰著述の『大日本膨張論』（民友社、一八九四年）を挙げている。この『大日本膨張論』に関して、同氏は「彼の『国民的膨張』論が疑いもなく、現実には日清間の緊張状態を契機として登場したものでありながら、論理的には必ずしも、日清間の戦争を前提とし日本の戦争目的遂行の手段として唱えられているのではない点である。彼の『国民的膨張』論は、膨張することそれ自体を自己目的化している。」と述べている。さらに続けて、この論拠の一助を『大日本膨張論』から「まさに膨張ありて征清あり」。征清のための膨張論なのではない。本来膨張すべき日本が、たまたま遭遇した『好機』が征清なのである。これが蘇峰の考え方であった³と述べている。同氏がこの『大日本膨張論』を取り上げた意味は、この著書が日清戦争中の一八九四（明治二十七年）一月二日に刊行されていることに起因している。この『大日本膨張論』の考察によつて、同氏は蘇峰の帝国主義的膨張論が三国干渉以前より芽生え始めていた思想であり、前述した蘇峰の述懐には再考の余地があるということとを証明したのである。

松本氏は続けて、「徳富蘇峰《時代の流れと言論人》」（『日本の思想家2』、朝日ジャーナル編集部編、朝日新聞社、一九六三年）を発表した。この論文においては、一九〇六（明治三十九）年に行い、その後『七十八日遊記』にて刊行された朝鮮、中国への旅行について述べられている。この旅行によつて蘇峰が知り得たことを、「中国の広大な領土と四億の人口をまのあたりにして知った『数』の偉大さであった」と同氏は述べており、蘇峰の新しい中国観を確認している。この論文において、中国

旅行に関する記述はこの程度に押さえられており、二つの旅行記に関する研究史は後述するにしろ、現在に至るまでさらなる深い考察への期待が残存する状況であることは否定できない点である。

また、日清戦争前後期における蘇峰の対外膨張観に関して、同氏はこの論文においても『大日本膨張論』を挙げている。そこで同氏は、「日本の対外的膨張こそが日本の『偉大なる国民的性格』とされ、日本の歴史をつらぬく理念とされている。かつて武備拡張反対を唱えた平和主義者蘇峰の面影はもはやない。しかし国をあげての対外戦争のさ中にあるのは、蘇峰のこの思想的転換もほとんど人の気にとまらなかった（中略）しかも蘇峰の国民的膨張論は、三国干渉による遼東半島還付問題を契機として、すでにだれの目にも明らか帝国主義論にまで成長していたのである⁴」と述べている。これまで、蘇峰自身が自伝において、「三国干渉を契機としてその思想が帝国主義化したと述懐していた。が、その予兆はすでに日清戦争中からの思想であり、自伝をも覆す研究成果を挙げたことは言うまでもない。

続けて、杉井氏が「徳富蘇峰の中国観」とくに日清戦争を中心として」（『京大文学部』三十号、一九七〇年）を発表した。この杉井論文は、前述した松本氏の研究を踏まえた上で著されたものであると同時に、蘇峰の中国観をより具体化した形で著したものであると言うことができる。杉井氏は、論文のはしがきにおいて、「（前略）松本氏の意図とその主張に原則的に賛成するものである。」とした上で、「しかしながら、『事態の真相を正しく伝える』ために、氏が言われるように、『日清戦争前後の彼の発言を一つ一つたどって行く』ことが期待されるにもかかわらず実際にはこれが欠落しており、しかも、蘇峰の当時の心

事を『むしろ内なる力の覚醒にもとづく国家的膨張の理念化』と結んでおられるが、その力の覚醒の力とは一体どのようなものをさしているか曖昧といわざるをえない⁷と松本論の問題点を述べ、より具体的な事例をもとにした考察を試みた。

この問題提起をもとにして、杉井氏は『自由・道徳及儒教主義』（私刑、一八八四年）、『将来之日本』（経済雑誌社、一八八六年）などを事例として、その考察を試みている。その見解を、『自由・道徳及儒教主義』においては、「そこには唇齒の地域における帝国主義の蚕食を見て、自由と独立と防衛を企図せねばならないという急迫した危機感が濃厚で、西力東漸に対応するアジアの連帯や提携、指導、さらには脱亜の性格はまだ明確化されていない。」と述べ、さらに、『将来之日本』においては、「かれは、一国の正義と牀面とを平和的な交渉談判で調整することが出来ない、万々止むをえない場合の戦争、すなわち仁臻り義尽きる場合の開戦をやむをえないとする。（中略）蘇峰における平民主義は、まさしく、その平民主義の名において、『一己人ヲ保護スル』平民主義の『義戦』の存在することを主張しているわけである。」と述べた後、その結論を「かれにおけるアジア問題の解決、清国問題の処理は、したがって、大江義塾時代に日清開戦の義を想定する萌芽を明確にもつていたことになる¹⁰」と述べている。この考察によつて、蘇峰の帝国主義論が日清戦争後の三国干渉を契機として、急激に膨張したのではなく、比較的初期においてもその芽生えは存在したということを証明している点においては、松本論と同調していると言ふことが可能である。しかし、その思想が遙かに遡った大江義塾時代から形成されていたという新しい視点を杉井氏は証明したのである。同氏は続けて、『国民之友』に掲載

された「大なる日本」、「日本国民の膨張性」、「日本の国防を論ず」などを事例として、具体的な引用を多数行っているが、この箇所においては、より具体的な考察が必要不可欠であり、研究史の一考察という枠組みで取り上げることが困難であると判断し、また別の機会にて考察させて頂くこととする。

同氏は右記論文に続けて、『徳富蘇峰の研究』（法政大学出版局、一九七七年）を発表した。この単行本は、基本的には前述した論文、「徳富蘇峰の中国観」とくに日清戦争を中心として」（前掲書）とほぼ同様の内容であり、大きく異なる箇所は多くはない。そのため、前論文から七年の歳月を経て出版された『徳富蘇峰の研究』に関する考察についても、割愛させて頂くこととする。

続いて、柴崎力栄氏により、「日清戦争を契機とする徳富蘇峰の転換について―海軍力と国際情勢への着目」（『大阪工業大学紀要人文社会篇』第三十六巻一号、一九九一年）が発表された。この論文は、一九八五年、東京大学における「史学会第八十三回大会日本史部会」にて口頭発表した後に、論文として掲載されたものである。柴崎論においては、そのテーマが示す通り、蘇峰の中国観を主論としたものではなく、日清戦争前後期における『国民新聞』の紙面報道状況、あるいは、そこからの国内外観を考察したものであるが、蘇峰の中国観を考察する上で貴重な資料と成り得るものである。具体的に同氏は、日清戦争中の一九九四年〜翌九五五年の時期を四期に分け¹¹、その『国民新聞』における紙面構成の変化から、蘇峰の思想変化を提起している。その結果、第一期において、国内政局に関する記事が多数を占めていた傾向から、第二期においては戦争報道準備に関する対外報道記事、第三期においては

戦後経営に関する記事、第四期においては日英同盟・軍備拡張・増税論へと次第に紙面の状況が転換したと証明している。このような区分を設けることによって、蘇峰の思想変化がより明確となったことは紛れもない事実である。

前述した通り、柴崎論文においては、蘇峰の中国観という範囲においては、多少かけ離れた考察を行っている面があるが、『国民新聞』の紙面状況から蘇峰の思想観を述べた当時としては画期的な見解であり、本稿のテーマにおいても優良な考察材料となるものである。

続いて、中村尚美氏により、「徳富蘇峰の「アジア主義」」（『社会科学討究』、一九九一年）が発表された。同氏は、前述した松本氏の「徳富蘇峰《時代の流れと言論人》」（前掲書）を基軸とした上で、論の展開を行っている。しかしながら、「その蘇峰が、やがて日清戦争を体験することによって平民主義・平和主義をかなぐり捨て、天皇中心主義を奉じて国権主義・侵略主義を主張するようになり、『変節漢』といわれて世の非難を浴びることになった¹²」と述べており、松本論を踏襲した杉井論における「かれの膨張的国家観は、日清開戦の前夜、『日本膨張論』をもって、平和主義、平民主義をかなぐりすてて展開されてゆくのではない¹³」という見解とは明らかに異なっているのである。この認識の相違に関しては、同様の著書からの考察を経て、先行研究も踏まえてはいが、著者同士の認識の相違点として明確に強調しなければならぬ点であろう。

中村氏の主論であるアジア主義に関しては、冒頭にて竹内好氏によるアジア主義¹⁴の概念を提示した上で、自らの見解を「アジア主義という傾向性は、一定の近代化を達成し、日清戦争に勝利してアジアにおける

唯一の独立国となったわが国が、欧米列強との国際関係においては、平等条約に象徴されるように依然として不断に大きな脅威を受けざるをえないという不安と焦燥感の中で、日清戦後の中国における列強の分割競争の激化と相まって、アジア主義をそだてる温床となったとみることができよう¹⁵」と定義している。

同氏は続けて、「それまでの生き方に一つの区切りをつける意味で、一九〇六（明治三十九）年五月から八月にかけて朝鮮・中国への旅に出た。この旅から彼が、中国の広大な領土と四億の人口を眼の当たりにして、「数の偉大」さの教訓を得たことはよく知られている¹⁶」と、前述した松本氏と同様の見解を述べており、旅行記からの視点も若干ではあるが垣間見ることができよう。また、同氏の論文においても、『大日本膨張論』を始めとして『時務一家言』など、さまざまな文献からの引用を行っている。この考察に関しては、杉井論文と同様、本稿においては割愛させて頂き、別の機会にて考察させて頂くこととする。

続いて、『MINERVA 日本史ライブラリー^⑤ 近代日本のアジア観』（ミネルヴァ書房、一九九八年）が発表され、その第一章において杉原志啓氏が「徳富蘇峰―「支那」観にみる「発想の根源」」という論題を著した。同氏による論文の着目点は、これまでの先行研究とは異なり、第二次世界大戦前後の時代背景を焦点として、蘇峰の中国観が考察されているところにある。これまでの蘇峰研究の主要を成していたものは、杉原氏が「全一〇〇巻におよぶあの浩瀚な歴史叙述『近世日本国民史』をはじめ、その龐大な著作のおよそ八割弱が大正期以降の晩年に書かれていたことは案外知られていない。おそらくそれは、蘇峰の論壇進出がきわめてはやく、かれの創設した『国民之友』『国民新聞』におけ

る青年期のはなやかな活躍が、われわれの脳裏に焼きついていること。また近年にいたるまで蘇峰研究も、その時代のかれの『平民主義』思想を基軸にしたものがほとんどだったことに起因するするだろう¹⁷」と述べている通りであり、この杉原論によって、蘇峰における中国観研究の新境地が開けたということが言えるのではないだろうか。

杉原氏の論文における主論を成しているものは、一言で要約するならば「日本人の国民性」という点である。同氏は、その特徴を「己惚れ根性」と「負けじ魂」という言葉を用いて説明している。「蘇峰によれば、この『己惚れ根性』は、明治維新¹⁷がなつてから、維新の指導者たちの手でことさらにつくりあげられたものではなかった。それは、建国 이래い長年月をへて醸成されてきたものだった¹⁸」と日本人の心底に潜在するその国民性を述べ、さらに続けて、「日本は、たしかに小国であり、品国であり、造物主からあまり恵まれた国ではなかった。しかし日本人はまさにそのことを百も承知していたがゆえに、『日本を大日本と云ひ、豊葦原瑞穂国と云ひ、且つ自ら日本を太陽に譬へて、世界の中心点と』主張して来た¹⁹」と述べ、「負けじ魂」の根本的発生要因を示唆している。これらの要因を提示した上で、同氏はその戦争責任論を、「すなわち、こんにちにおいて日本人を咎めるとするなら、「支那」を見誤り、英米を見誤り、ドイツ、イタリヤを見誤り（中略）日本人としては自業自得、だれをも咎めるべくもなく、もし咎めるべき者があるとするなら、我れみずからであるという。したがって日本人の中には『之を軍閥とか、唯だ其の責任を一局部に推諉して、涼しき顔をしてゐる者もあるが、総ての行動は、予の見る所に依れば、日本国民全部が負ふべきも』であった²⁰」と述べている。この日本人の国民性を表した点は同論

文において、最も注目し、日清戦争の勝利から第二次世界大戦の敗戦に至るまで顕著に表れ、それと同時に、現代社会にも通ずる日本人の特質とすることができるとはならないだろうか。

続いて、藪田謙一郎氏により、「徳富蘇峰の見た清末中国」(『曙光』第十二号、二〇〇一年)が発表された。同氏による論文の主論を成しているものは、『七十八日遊記』(前掲書)を検証することによって、蘇峰がどのような中国観を再認識したかという点である。蘇峰の旅行記からアプローチは、筆者も現在考察を試みている論点であるが、その中国観を同氏は、「蘇峰の目に映った中国人は、国家という觀念が伝統的に欠乏しており、極めて利己的な存在である、というものであった²¹」と、マイナス面を述べており、それに続けて、「蘇峰が感心したというのは、第一には、その人口のもつ力であった²²」と、プラス面を述べている。この蘇峰の中国観は、『七十八日遊記』から明確に見えてくるものであるが、しかし、その一方で重要視しなければならないものは、この蘇峰遊記の裏側を読み取ることである。同氏は、それを「中国人よりも、むしろ日本人と接触することが多かったように思われる」、「蘇峰はあらかじめ抱いていた中国像に基づいて『触目』、『感触』を整理した、といった方が表現として正確であろう。そして、そこで描かれた中国は、蘇峰が『興国の市民』として強い先入観をもって観察し、あるいは確認した中国の姿であったということができよう²³」と述べている。さらには、山路愛山の『七十八日遊記』批判²⁴を取り上げている点も注目できる。このような旅行記をそのまま鵜呑みにするのではなく、そこから見えてくる裏側を蘇峰の思想と表裏一体として読み込むことで、蘇峰における中国観の真の姿が見えてくると藪田氏は述べているのであると、筆者は

考える。

藪田氏は続けて、『民友社とその時代―思想・文学・ジャーナリズム集団の軌跡―』（ミネルヴァ書房、二〇〇三年）での第一章において、「徳富蘇峰の中国認識」を著した。同氏によるこの著書の特徴は、『七十八日遊記』（前掲書）、『支那漫遊記』（前掲書）に焦点を当て、日露戦争後から第一次世界大戦に至るまでの蘇峰の中国観を考察したものであることである。同氏は蘇峰の中国観を考察した上で、「蘇峰の中国分析は、その歴史・民族性を重視し、同時代の中国を歴史から類推し、歴史に回答を求めるといふ姿勢が顕著である。だが、蘇峰の中国への視点を貫くものは、中国に如何に帝国主義を実行していくのか、という問題意識であったように思われる。歴史や民族性は、この問題意識による立論のために、現象を整理するのに用いられているに過ぎない、といえは過言であろうか²⁵」と述べている。これは、杉原氏が前述した「徳富蘇峰―「支那」観にみる「発想の根源」」（前掲書）において、「今も昔も人間には大して変りがない無いと云ふことを考へなければならぬ。是が人間学のいろはである²⁶」と蘇峰の人間観を記述すると同時に、「蘇峰は各時代ごとの人間の本质がほとんど不変である人間観をいだいていたのであった²⁷」と述べていることから理解できるように、蘇峰の中国観を考察する上で、歴史的視点の重要性は切り離すことのできないものである。

同氏はまた、『七十八日遊記』、『支那漫遊記』において蘇峰が見た中国観を多数の引用を用いて述べているが、前述した同氏の論文「徳富蘇峰の見た清末中国」と重複する箇所も多々あることから本稿においては、割愛させて頂くこととする。

結びにかえて

このように、「徳富蘇峰における中国観」に関して、その研究史を考察してきた。この考察によって、従来は「蘇峰における中国観の研究」が日清戦争を中心とした『大日本膨張論』などを主観として、その国民的膨張論が日清戦争以前から形成されていたのであるという自伝を否定する事実探究が中心に為されてきたことが明確となった。それと同時に、前述した二つの旅行記から蘇峰の中国観を考察するという研究は、ごく最近になって始められた研究であり、さらには第二次世界大戦以降における蘇峰研究は、現代においては余り進展していないということがマイナスの事実としてある。

杉原氏が「かれが一貫してわが国の指導的論客のひとりだったという事実を銘記しておかなければならないであろう。なぜならそれは、かつて蘇峰の立論がきわめて長期間にわたって、しかもすくなく国民の支持をうけていたこと。したがってかれの言説の推移には、明治維新からさきの大戦にいたる近代日本の道のりをそのまま反映するところがあつたことを示唆するからである²⁸」と述べているように、戦後において日本の歴史界から消滅させられた徳富蘇峰という人物を再考しなければ、明治、大正、昭和期における真の日本の姿を見ることは不可能であり、それと同時に、またも同じ過ちを犯すのではないかという強い疑問も生ずるところである。

本稿は、研究史のみにその主眼を絞って、「徳富蘇峰の中国観」における一考察を試みたものであり、蘇峰の著作、二つの旅行記からの引用は最小限に止めるに至った。そのため、本稿によって十分な深度と理解

度を得ることは困難であると考えますが、その課題は、今後十分に解消することの出来るものと考えている。それらの課題を自らに課したところ、本稿を締めくくるところとする。

【註】

- (1) 「蘇峰自伝」(中央公論社、一九三五年)三二〇頁。
- (2) 「国民的使命感の歴史の変遷」膨張的国民―徳富蘇峰について―一〇二頁。
- (3) 註(2) 前掲書一〇一頁。
- (4) 「徳富蘇峰《時代の流れと言論人》」五十二頁。
- (5) 蘇峰の帝國主義論・膨張論が三国干渉によって、確立されたものであることを否定するものではない。この三国干渉を契機として、蘇峰の日本膨張論が前面に押し出されたことは言うまでもない。
- (6) 「徳富蘇峰の中国観―とくに日清戦争を中心として―」六十四頁。
- (7) 註(6) 前掲書六十四頁。
- (8) 註(6) 前掲書六十八頁。
- (9) 註(6) 前掲書七十頁。
- (10) 註(6) 前掲書七十一頁。
- (11) 「日清戦争を契機とする徳富蘇峰の転換について―海軍力と国際情勢への着目―」三十三頁。柴崎氏は、「①一八九四(明治二十七年)年三月一日の第三回総選挙、②韓半島制圧・黄海開戦後の同年十月初旬、③一八九五(明治二十八年)年四月二十三日の独露仏三国干渉、という三つの境界により、四期に分けられる」と述べている。
- (12) 「徳富蘇峰の「アジア主義」」四一七頁。
- (13) 「徳富蘇峰の中国観―とくに日清戦争を中心として―」七十九頁。
- (14) 「徳富蘇峰の「アジア主義」」四一五頁。中村氏は、竹内好氏による「発生のには明治維新革命後の膨張主義の中から、一つの結実としてアジア主義が生まれた、と考えられる。しかも、膨張主義が直接にアジア主義を生ん

だのではなく、膨張主義が国権論と民権論、または少し降って欧化と国粹という対立する風潮を生み出し、この双生児ともいえるべき風潮の対立の中からアジア主義が生み出された、と考えたい」(『竹内好評論集第三巻 日本とアジア』(筑摩書房、一九六六年、二六一頁)から引用。

- (15) 註(14) 前掲書四一六頁。
- (16) 註(14) 前掲書四二七頁。
- (17) 註(14) 前掲書三十七頁。
- (18) 「徳富蘇峰―「支那」観にみる「発想の根源」」二十九頁。
- (19) 前掲書三十一頁。杉原氏が蘇峰著述の『勝利者の悲哀』(講談社、一九五二年)一〇八頁)から引用。
- (20) 前掲書二十八頁。杉原氏が「徳富猪一郎 宣誓供述書」(『東京裁判日本の弁明』、小堀桂一郎編、講談社、一九九五年、三〇六頁)から引用。
- (21) 「徳富蘇峰の見た清末中国」六十八頁。
- (22) 註(21) 前掲書六十六頁。
- (23) 註(21) 前掲書六十九頁。
- (24) 註(21) 前掲書六十九頁。その具体的な内容は、「愛山は、『七十八日遊記』の大部分は蘇峰が「自ら支那を見たる觀察」ではないとし、その語るところは「裸体の支那ではなく、予め書物から得た蘇峰の「胸中の支那」であろう、と述べている」、「また、蘇峰が中国で接触した人物は、中国人は高級官吏、日本人も「公使、領事、学士、紳商の類」であり、中国の平民、日本の労働者と語る機会はなかったようだと指摘し、「自己の思想を作るべき材料の性質を吟味するは最も注意すべき所に非ずや」と蘇峰の態度に疑問を投げかけている」である。
- (25) 註(21) 前掲書一八一頁。
- (26) 「徳富蘇峰―「支那」観にみる「発想の根源」」三十九頁。杉原氏が蘇峰著述の『時勢と人物』(民友社、一九二九年、二十一―二十三頁)から引用。
- (27) 註(26) 前掲書三十九頁。
- (28) 註(26) 前掲書二十四頁。

【参考文献】

- ・柴崎力策 「日清戦争を契機とする徳富蘇峰の転換について―海軍力と国際情勢への着目」(『大阪工業大学紀要人文社会篇』第三十六卷一号) 一九九一年
- ・杉井六郎 「徳富蘇峰の中国観―とくに日清戦争を中心として―」(『京都大学人文学報』三十号) 一九七〇年
- ・杉井六郎 『徳富蘇峰の研究』 法政大学出版局 一九七七年
- ・杉原志啓 「徳富蘇峰―支那」観にみる「発想の根源」(『近代日本のアジア観』) 岡本幸治編 ミネルヴァ書房 一九九八年
- ・中村尚美 「徳富蘇峰の「アジア主義」」(『社会科学討究』) 一九九一年
- ・松本三之介 「国民的使命感の歴史的変遷―膨張的国民―」(『徳富蘇峰について』) (『近代日本思想史講座Ⅷ 世界の中の日本』) 筑摩書房 一九六一年
- ・松本三之介 「徳富蘇峰『時代の流れと言論人』」(『日本の思想家2』) 朝日ジャーナル編集部編 朝日新聞社 一九六三年
- ・藪田謙一郎 「徳富蘇峰の見た清末中国」(『曙光』第十二号) 二〇〇一年
- ・藪田謙一郎 「徳富蘇峰の中国認識」(『民友社とその時代―思想・文学・ジャーナリズム集団の軌跡―』) 西田毅他編 ミネルヴァ書房 二〇〇三年

(いたくら ひろあき)

城西国際大学修士課程人文科学研究科国際文化専攻